

コロナ新変異株が国内「第8波」の主流に？ 欧米で置き換わり進む

2022/11/10 毎日新聞

新型コロナウイルスの新たなタイプの変異株が登場し、欧米ではじわじわと置き換わりが進んでいる。免疫を逃れ、感染が広がりやすいのではとの指摘もある。すでに国内でも確認されており、この冬に起こるとされる感染「第8波」では、こうしたタイプが主流になる可能性がある。

国内で夏の第7波で流行したのがオミクロン株の派生型「BA・5」で、世界的に現在も主流だ。だが今後は、いずれもオミクロン株の派生型である「BQ・1系統」と「XBB」が広がる可能性があるとして、世界保健機関（WHO）や専門家は注視している。

感染の波と主な変異株	
第4波(2021年春)	アルファ株
第5波(21年夏)	デルタ株
第6波(22年初め)	オミクロン株BA・1
第7波(22年夏)	オミクロン株BA・5
第8波(22年冬?)	オミクロン株BQ・1系統 (BA・5の派生型)
	オミクロン株XBB (BA・2系統の組み換え)

米疾病対策センター（CDC）によると、米国では、BA・5は8月20日までの1週間では感染者のうち86・4%を占めていたが、11月5日までの1週間では39・2%と半数以下になった。その代わりにBQ・1系統が徐々に増え、35・3%に達した。

XBBはシンガポールで10月に一時的に急増した。組み換え体と言われ、BA・2系統のうち二つの変異株が組み合わさったタイプだ。

中国・北京大などのグループが10月に発表した査読前の論文によると、両方とも、BA・5に比べて感染を防ぐ中和抗体から逃れやすい「免疫逃避」の特徴があったとしている。

重症化リスクについては明確には分かっていない。

国内でも両方とも確認されており、専門家が4日の東京都の会議で示したゲノム解析結果によると、都内ではBA・5が93・8%と大勢で、BQ・1系統は1・6%、XBBは0・3%だった。

感染状況について東京医科大の濱田篤郎特任教授が解説する。「第7波で主流だったBA・5の『残り火』が、感染対策の緩和で再燃している状態と考えられる」。今後は「免疫を回避しやすいオミクロン株の派生型が国内に流入することで、感染者が増加する可能性がある」とし、こうした派生型が主流になる可能性があるとして指摘する。

国立感染症研究所が9日に公表した推計でも、「不確実性は高い」としながらも、BQ・1系統の割合が12月第1週には79%となるとした。

米国では11月下旬の感謝祭で人の移動が増え、感染拡大が懸念される。国境を越えた往来が活発化しており、日本では12月にも広がる恐れがあるとみている。

オミクロン株の一種であることから、オミクロン株対応のワクチンの接種で重症化を防ぐ効果が期待できる。感染力の高い派生型に次々に置き換わる新型コロナは厄介な存在だ。ワクチン接種や感染で人が獲得した免疫を逃れるように進化してきたと考えられる。だが最近のオミクロン株の派生型は、遺伝子の変異している部分に共通点がみられるという。このため濱田特任教授は「流行の監視や、ワクチン開発・接種などの対策を取りやすい可能性もある」と話している。【村田拓也】